

I 仲間とかかわりながら、よりよい自分を求めていく「道徳」

1. 「創造的な知性を培う」道徳の時間の学び

「道徳」の時間では様々な道徳的価値を学んでいくが、それが実際の行為になかなか結びつかないという現状が見られる。そこで、子どもの道徳的実践力を高めるために創造的な知性を培う「道徳」の学びを以下のように考えた。

「創造的な知性を培う」道徳の時間の学び

道徳的価値の自覚を深め、これからの自分の行為を支える価値観を創っていく学び

「そうすればよいことは分かっている。でも、なかなかできない。本当はどうすればよいか分からない。」子どもたちにとってそういう状況はよくある。そのような状況を打開するためには自分の行為を支えている価値観に目を向けていく必要がある。「よいと分かっているのになかなかできないのはなぜか、どうしたら自分はもっとよくなれるのか」等を考えることで、道徳的価値の自覚を深め、道徳的実践力につながる「これからの自分の行為を支える価値観を創っていくこと」を大切にする。自分の行為を支える価値観に目を向けていく過程では、仲間とのかかわりは重要である。自分とは異なった価値観・似かよった価値観などから自分の行為や価値観を見直し、よりよい自分を求めていく姿が期待できるからである。

2. 「道徳」ではぐくみたい「感性」「科学的なものの見方・考え方」

上記のような「道徳」の学びを具現するためには、次のような「感性」「科学的なものの見方・考え方」をはぐくむことが大切であると考えた。

(1) 「道徳」ではぐくむ「感性」

道徳的問題場面での道徳的価値と自分の行為や価値観との矛盾を感じる力

ある道徳的問題場面について互いの考えや思いを出し合っていく。その中で「そうすればよいことは分かっている。でもなかなかできない。本当はどうすればよいか分からない。」等の心の状況が明らかになり、道徳的価値と自分の行為や価値観との矛盾がはっきりしてくることで「自分はどうか考えればよいのか」という自己に向けた問いが生まれてくる。

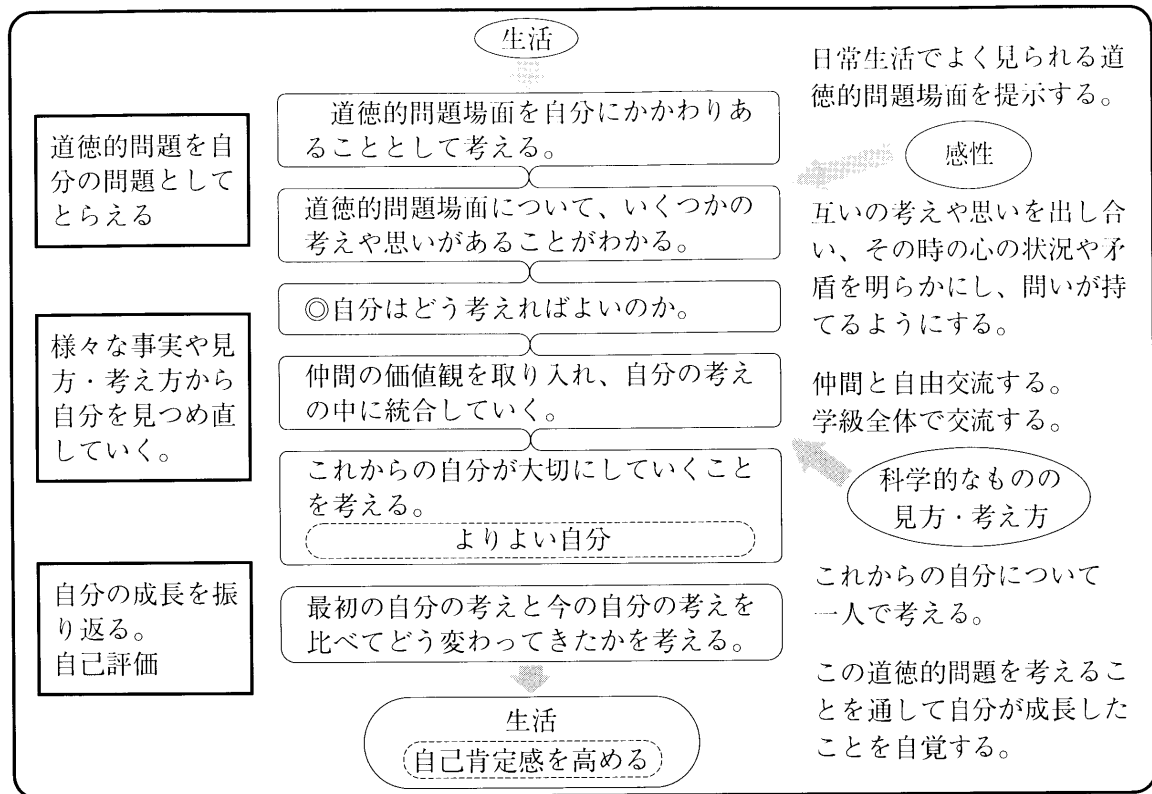
(2) 「道徳」ではぐくむ「科学的なものの見方・考え方」

仲間の価値観を自分の中に取り入れ、統合していく力

道徳的価値の自覚を深めるために仲間と考えの交流を行い、「〇〇さんの考えはなるほどと思う。自分もそんなふうになりたい。」等、仲間の価値観を主体的に受け止め自分の考えの中に統合していく。そして、これからの自分の行為を支える価値観を創り、自分は何を大切にしていきたいかを決めていくことが、よりよい自分を求めていくことにつながっていく。

3. 「創造的な知性を培う」 道徳の時間の学習過程

(1) 学習過程



(2) 大切にしたい働きかけ

① 問題場面を選定し、自分にかかわりのあることとして考えられるようにする。

問題場面の状況を子ども自身が図式化したり、吹き出しプリントを利用して心の状況をイメージ化したり、必要に応じ似たような場面や経験を想起したりするよう働きかける。

② 問題を自分なりに考える→比較する（仲間と交流する）→行為を支える価値観を創る→これからの自分の行為を考える という流れを設定する。

道徳的価値の自覚を深めるためには仲間の意見を聞く必要が生まれてくる。その際、各自の考えを座席表に記入したのを見て自分が聞いてみたい人を選びながら交流するよう働きかける。

③ 自分が成長したことを自覚できる場を設定する。

それまで考えてきた自分の道筋や大切にしていきたい価値がはっきりするように、「学習前の自分の考え」「学習後の自分の考え」「どんなことを大切にしたいか」を記述する場を設定する。

4. カリキュラム編成の視点

総合的な学習や各教科で学んだ価値の体系化や統合化が行われていく場が「道徳」である。特に、自然科学科や算数科で身に付けた科学的な見方・考え方や数学的思考などは、筋道立てて物事を捉え判断していく力として道徳でも大切な力として位置付けていく。また、特別活動の内容は、子どもたちの学校生活を支える最も基礎であると同時に、「自分がどうあればよいか」という道徳的問題を常に内包している。特別活動との関連を重視し、身近な人々とのつながり、その中にいる自分を意識していく「道徳」の学習を進めていく。

Ⅱ 実践の概要

第4学年

「ゴミを捨てる心」

主な内容項目 4(1)約束や社会のきまりを守り、公德心をもつ。

1. みんなのためによりよいことを進んで行う自分になるために、仲間とかかわりながらこれからの自分の行為を支える価値観を創っていく学び

日常生活の中によく見られるゴミが落ちていても拾わない状況を道徳的問題場面として取り上げ、どうしていけばよいか検討していく。日頃、意識が弱かったことについて見直し、ゴミは捨てた方がよいことは分かっているが、なかなかできない自分がいるという矛盾を感じ、自分の問題として考えていく。そして、ゴミを捨てる自分になるために、ゴミを捨てることは自分にとってもみんなにとっても気持ちのよいことであることに気づき、自分がよいと思ったことを積極的に行おうとする意欲を高めることを願った。さらに、学習前と学習後の自分の考えを比べ、これからの自分の行為を支える価値観の高まりを感じ、自己肯定の意識が強まっていくことを期待した。

2. 主題の構想

(1) 主題の目標

ゴミが落ちているのに拾わない自分たちの心の状況を明らかにする中で、ゴミを捨てることは自分にとってもみんなにとっても気持ちのよいことであることに気づき、自分がよいと思ったことを進んで取り組んでいこうと意欲を高めることができる。

(2) 追求の構想（3時間）

道徳的問題場面の提示

A子さんは、B子さんと教室で楽しくおしゃべりをしていた。ふと、床を見るとゴミが落ちていたのに気付いた。でも、「まあいいか」と思い、そのままにして楽しくおしゃべりを続けた。

A子さんと同じように自分も拾わないときがある。そのとき自分はどんなふうに思っているのだろう。

まあいいやと思う 自分が出したゴミじゃない 誰か拾ってくれる 目に入らない等

ゴミは捨てた方がいいと分かっているけど実際にはできない。ゴミを捨てる自分になるためにはもっと気持ちを高めたい。そのためになぜゴミを捨てるのか考えよう。

◎なぜゴミを捨てるのか

仲間と交流しよう

きれいにした方が気持ちがいい 自分のためにもなるし他の人のためにもなる等

これからの生活の中で自分はどんな気持ちを大切にしていきたいかノートにまとめよう。

ゴミを捨てる自分もみんなも気持ちがいい。ゴミを見つけたら進んで捨てる気持ちを大切にしたい。等

これまでの学習を振り返ろう。

私は最初、ゴミなんか誰か拾ってくれるからいいやと思っていたけれど、この学習をしてみて、ゴミを捨てることは自分にとっても気持ちのよいことだし、それがみんなのためクラスのためにもなるというふうに気持ちが変わってきた。この気持ちを大切にしていこうと思ったことは進んで取り組みたい。等

3. 授業の実際

(1) ゴミは拾った方がいい。でも、拾わない自分がいる

奈美さんは、何事にも前向きに取り組むよさを持っている。ゴミを拾うことについても「ゴミは拾った方がよい」と考えている。奈美さんは一般的によいとされていることについて「しなければいけないこと」だという価値観で行動することが多い。そんな奈美さんに「ゴミを拾うことはなぜよいことなのか」について「よいと言われているからやる」という外側からの価値ではなく、自分の中に「なぜそれがよいのか」という価値観を高めていってほしいと願った。

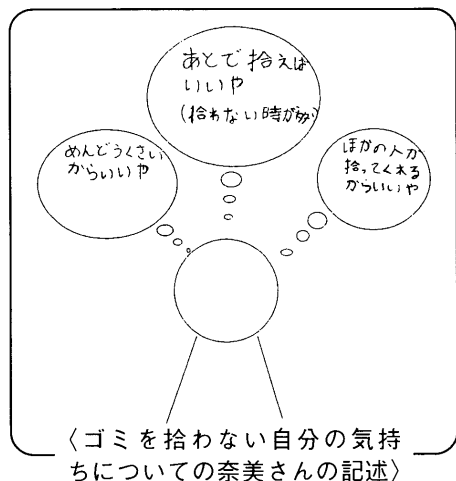
子どもたちの様子を見てみると、教室の中にゴミが落ちていてもあまり拾う様子はない。そこで、1時間目に次のような道徳的問題場面を提示した。

道徳的問題場面

A子さんはB子さんと教室で楽しくおしゃべりをしていた。ふと、床を見るとゴミが落ちていたのに気付いた。でも、「まあいいか」と思い、そのままにして楽しくおしゃべりを続けた。

「A子さんの態度についてどう思う？」という投げかけに、奈美さんは「自分もA子さんみたいところがある。でも、やっぱりゴミが落ちていたら拾った方がいいと思う。」と発言した。奈美さんに続いて数人の子どもたちも「自分もA子さんと同じ。」と発言。子どもたちは「ゴミを拾わない自分」が心の中にあることに気が付いてきた。そこで「ゴミを拾わない自分はどんな気持ちなのか。」考える場を設定した。奈美さんはプリントに自分の気持ちを書き込んでいった。

ゴミを拾わない自分の気持ちを出し合う中で、拾わない理由が色々あることが明らかになってきた。



しかし、奈美さんは「ゴミを拾わない自分はよくない、ちゃんと拾った方がいい。」という考えも一方であることを発言してきた。そして、「ゴミを拾わない自分はあまりよくない。じゃあどうしたらよいのか」自分の考えをノートに書いた。

話が終わったら拾うとか、時間のあるときに自分できちんと拾う。もしそのゴミがきたなかったらティッシュにくるんで捨てる。人まかせではダメ!!

〈「ゴミを拾わない自分はよくない。ではどうするか」についての奈美さんの記述〉

奈美さんを含め、ほぼ全員が「ゴミは拾った方がよい」と考えてきた。しかし、授業後ゴミを拾う姿は見られなかった。私は「ゴミを拾うことはそう簡単にはできない」という実際の自分たちの姿に目を向けていってほしいと願った。

2時間目。前時の終末では、「ゴミは拾った方がいい。」とどの子も言っていたことを子どもたちに確認した。しかし、床を見るといくつかのゴミが目に入ってくる。奈美さんもゴミが落ちていたのに気付く、苦笑いを浮かべた。「ゴミは拾った方がいい」という道徳的価値は分かっているが、「実際にはできていない」という自分の行為との矛盾を感じ始めた奈美さんである。

(2) ゴミを拾う自分になりたい、そのためには

子どもたちが自分の中に矛盾を感じている状況を受けて、私は「ゴミを拾う自分になりたい、と言っていたのに、実際はどうなの？本当にそう思っているの？」と問うた。子どもたちは「うん」とうなずきながらも迷ったような表情を浮かべ、沈黙が続いた。しばらくすると映子さんが「本当に教室をきれいにしたいという気持ちが大切だと思う。」と発言した。続けて慎一さんも「ゴミを拾おうという意識があることが大切。」と発言してきた。2人の発言に奈美さんは「私もそう思う」というOKのサインを手で表した。そして、奈美さん自身も「きれいにしたいという意識があればいい。まず、拾おうと思う気持ちが大切。」と発言してきた。「教室をきれいにしたいという気持ちを高めることが大切」という子どもたちの意識の高まりを受け、「気持ちを高めていくことが大切、そのために、なぜゴミを拾うのか」をプリントに書く場を設定した。

きたないところだと思われるよりきれいなところだと思われた方が気分がいいから。きたないところよりきれいなところの方が気分がいいから。きれいな方が印象がよいと思う。だからゴミを拾う。

—〈なぜゴミを拾うのかについての奈美さんの記述〉—

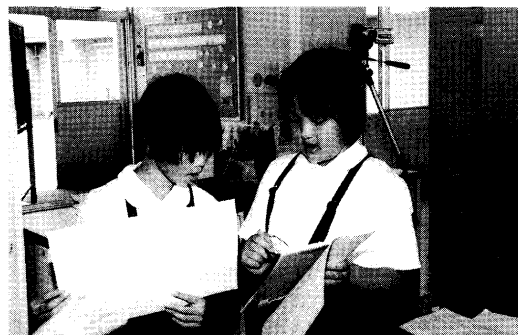


〈「まず、拾う気持ちが大切」と発言する奈美さん〉

奈美さんは、「きたないところだと思われるよりきれいなところだと思われた方が気分がいい。」とゴミを拾う理由を自分の中ではっきりさせてきた。これは「他の人から見て」という価値から考えている奈美さんの姿である。

(3) 純子さんの「ゴミを拾う理由」を聞いてみたい

各自、自分の考えをプリントに記入したあと、慎一さんの「他の人の意見を聞くと自分の考えが高まる」という発言から、友だちの考えを聞きたいという状況が生まれたことを受けて、学級の仲間と自由交流する活動を組織した。その際、前時の終末の考えを座席表に記入したものを配り、自分が聞いてみたい人を選ぶときの参考にするように促した。奈美さんは早速プリントに目を通し、純子さんの書いたものを読んでいた。自由に立って交流するよう促すと、奈美さんはすぐに純子さんのところに行って、純子さんの考えを聞いていた。純子さんは「ものに感謝する心が大切。」と話し、奈美さんはそれをノートに書き込んでいた。そして、自分の考えを純子さんに伝えていた。その後、3人の仲間と順に交流した奈美さん。



〈純子さんに「ゴミを拾う理由」を聞く奈美さん〉

仲間と交流して自分の考えがどう変わったのかを聞くと、奈美さんは真っ先に手を挙げ、「純子さんが言ったんだけど、ものに感謝するというのはとても大切だと思う。なぜかというともともと自分が使ったものがゴミになるのだから、その使ったものに感謝する気持ちはとても



〈真っ先に手を挙げる奈美さん〉

大事だと思う。」と発言した。「他の人にどう思われるかではなく、ゴミを拾うことはものに感謝する気持ちに通じている」という自分に向けた価値から考えをつくってきた奈美さんである。

(4) ゴミを拾える自分になるために、どんな気持ちを大切にしていけばよだろう

その後、七海さんが「沙織さんから聞いたんだけど、下級生のお手本としてゴミを拾うのは当たり前だと考えが高まった。」と発言。沙織さんも「ゴミを拾う習慣を身に付けることが大事だと思う。」と発言してきた。このような発言を真剣に聞いている奈美さん。

「ゴミを拾う自分になりたい」と子どもたちの気持ちが高まってきたと判断し、「これからの生活の中で自分はどんな気持ちを大切にしていきたいか」をノートに書く場を設定した。奈美さんは、自分の考えを次のようにノートにまとめた。

ゴミを一つでも少なくすることは自分のため、他の人のためにもなる。そういう習慣を身につければよい。外でもゴミを拾うことができれば、下の学年のお手本になるし、そういう人がたくさん増えれば世の中もよくなると思う。大切なのはきれいにしようと努力する気持ちを持つことだ。

— 〈「これからの生活の中でどんな気持ちを大切にしていきたいか」についての奈美さんの記述〉 —

沙織さんが発言した「そういう習慣が大事だ」という考えや、七海さんが発言していた「下の学年のお手本になる」という考えを取り入れ、他の人がどう思うかばかりではなく、自分のためにもきれいにしようと努力する気持ちが大切だと自分を見つめ直している奈美さんである。

これまでの学習を振り返り、自分がどんなふうに変わってきたか、書く場を設定した。奈美さんはすぐにえんぴつを持つとどんどん書き始め、次のように記述した。



〈熱心に学習の振り返りについて書き進める奈美さん〉

私は最初、ゴミなんか他の人や掃除の人がやってくれるからいいやと思っていたけれど、この学習をやってみて、ゴミを自分が一つでも拾えばきれいになるんだなと思った。友だちの意見も聞いて例えば純子さんの言った、ものに感謝というのはとても大切なことだと分かった。私は純子さんや他の人の意見を聞いてゴミを拾う習慣を身に付けて、外に行ってもゴミを見つけたらすぐに拾える自分になっていきたいと思う。本当に変わるのには時間がかかるかもしれないけれど、少しでも変われたらいいなと思う。

— 〈「これまでの学習を振り返って」の奈美さんの記述〉 —

この学習を通して特に純子さんの言った「ものに感謝」という気持ちの大切さを感じ、ゴミを拾えるよりよい自分になっていきたいという意識を高めてきた奈美さん。「ゴミは拾うもの」

という一般的価値から「ゴミを拾うことのよさ」を自分の中に内面化し、これからの自分の行為を支える価値観を創ってきた奈美さんである。「ゴミを拾う習慣を身に付け、外に行ってもゴミを見つけたらすぐに拾える自分になっていきたいと思う。」と、道徳的実践力を高めてきた奈美さん、「少しでも変われたらいいなあ」と、よりよい自分を求める奈美さんの姿が伺える。

Ⅲ 成果と課題

成 果

感性「道徳的問題場面で道徳的価値と自分の行為や価値観との矛盾を感じる力」を働かせることで、自己に向けた問いが生まれてくる。

「ゴミは拾った方がよいと思っている。でも、実際にはうまくやれていない。」という自分を強く認識することで、行為を変えていくためにはその基となる気持ち（価値観）を高めることの大切さに気づき、「自分の気持ちを高めるために何を考えていけばよいか」と自己に向けた問いが生まれる。

課 題

科学的なものの見方・考え方「仲間の価値観を自分の中に取り入れ、統合していく力」を働かせるために、次のような工夫が必要である。

奈美さんは純子さんとの交流により、純子さんの考えを自分の考えに取り入れ、これからの自分の行為を支える価値観を創っていくことができた。しかし、奈美さんのように純子さんに聞けばよさそうだと自分なりに判断できず、誰に聞いたらよいか迷っていた子どもも見受けられた。そこで、以下の2点を授業改善に取り入れていきたい。

(1) 仲間と交流する観点をもってかかわるようにする。

「①自分と考えが似ている人 ②自分と考えが反対の人 ③自分の考えにはない考えをしている人」

(2) 考えの統合を助けるために、子どもが自分の考えを中心にウェビングをするなどの工夫を取り入れる。

<主な参考文献>

永田 繁雄 2004『確かな「自己」を育てる道徳授業』中越道徳研究会主催講演会資料

押谷 由夫 2000『新しい道徳教育の理念と方法』東洋館出版社

新宮 弘識 1997『子どもの可能性に立つ道徳教育』国土社